

体数増加率は高い。

課題 2

冷温帯域におけるオスの移動分散様式

小金沢正昭(栃木県立博物館)

東 英生(野生動物保護管理事務所)

ニホンザル地域個体群におけるオスの移動分散を明らかにするため、前年度に引続き、栃木県日光においてテレメトリー法を適用した個体追跡調査を行なった。本年度は7頭(オス4頭、メス3頭)捕獲し、イレズミをほどこした後、テレメータ(146MHz)を装着した。

1984年から89年の6年間に延べ12頭の成獣オスと亜成獣(2才)1頭の計13頭を捕獲し、追跡した。調査は、月5日から1週間の夜間連続追跡を行ない。テレメを装着した成獣メスによって同時にモニターされているA、B両群の位置とオスのロケーション地点から、オスの移動距離、分散距離、群れとの距離などを求め、さらに群れへの出入りを観察した。

群れ内オス6頭(A群4頭、B群2頭)の内、少なくとも1回は群れを離れた個体は3頭、群れ内に留まっているのは3頭であった(うち1頭は5年間留まり、2頭は本年度捕獲したものである)。追跡期間中に事故で死亡した1頭と追跡期間の短い1頭を除き、群れ外オス5頭の内、一時間にせよ群れに入ったのは、#5335とB群の周辺オスからA群に入った#5014の2頭であった。#5014は群れに入る前の2年間はA群の周辺にいた。#5335は、A群から離れることなく移動していたが、本年度に入ってA群周辺からも離れた。また、他の3頭は群れの周辺に近づくことはあっても、A、B両群へ入ることはなかった。しかも、この3頭(#5340: C群行動圏内捕獲、#6110と#6458: B群行動圏内)は、捕獲時の群れの行動圏から離れ、#5340は4ヶ月後8km離れた群れの行動圏へ#6110と#6458は隣接するC群の行動圏へ移った。さらに#6458は、その後A群の行動圏へ移り、周辺オスとなっていた。

これらのことから、オスの移動分散様式には、かなり短い時間の長距離移動するタイプと、比較的長い期間群れの周辺に留まっているタイプの2つ存在が示され、その割合は後者の方が多いと判断

された。

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座 久明(富山県大沢野中学校)

加藤 満(愛知県立高蔵寺高校)

1988年8月に、富山県宇奈月町内山で捕獲した野生群(OH-A群32個体)の成体雌にテレメータを装着し、遊動域の季節変動の調査を継続している。調査は、原則として毎月連続10日間、日没後群れの泊り場の位置を記録して、泊り場の分布状況から群れの遊動域を決定するという方法をとった。88年9月から89年8月までの12ヶ月間に109日間の調査を行い、109ヶ所の泊り場を記録した。泊り場は黒部川の左右両岸に分布しており、長さ約6.4km、幅約1.9km、面積約11.0km²の範囲で、川に沿って南北に細長く伸びている。泊り場は右岸側に60ヶ所、左岸側に49ヶ所を記録した。泊り場の標高で最も低い地点は、標高170mの黒部川の川原であり、最も高い地点は標高750mの宇奈月温泉右岸の稜線上であった。テレメトリー法による調査以前に、1979年から88年までの10年間に直接観察法による観察記録から推定していたこの群れの遊動域は、長さ約4.4km、幅約0.5km、面積約1.9km²であり、テレメトリー法に比べると20%以下の大きさにとどまっている。

群れの遊動域は季節によって大きく変動し、春と秋は落葉広葉樹の自然林を利用し、夏と冬は農作物に依存して人家近くの農耕地をよく利用した。季節毎の土地利用の特徴が顕著な4月、8月、10月、12~1月の各月の遊動状況は次のとおりである。4月21日~29日の遊動域は、黒部川右岸の高基草原がよく発達した地域(標高200m~700m、面積1.51km²)であり、草原や落葉樹林でヨモギ、オオイタドリ、シシウド、トチ、イタヤカエデ等の若葉を採食した。8月7日~18日は、宇奈月町内山、音沢、栗虫、中谷地区の農耕地とその周辺のスギ植林地(標高200m~400m、面積3.21km²)を遊動した。農作物以外では、クズの花、葉、ウワミズザクラ、ミズキの果実を採食した。10月8日~17日は、黒部川右岸の自然林(標高200m~500m、面積0.91km²)を利用し、クリ、マルバマンサク等の種子、果実を採食した。12月27日~1月5日は、夏の遊動域と似た地域(標高200m以下、面積0.82km²)を利用した。農作物が少ないため、